

ゐのはな

千葉大学医学部同窓会報 第95号 題字 鈴木五郎

編集兼発行者

千葉大学医学部

ゐのはな同窓会報編集室

〒280 千葉市亥鼻1-8-1

千葉大学医学部内

ゐのはな同窓会

電話千葉 (0472) 22-7171 内線2038

ゐのはな同窓会会長 に就任して

名尾良憲

このたび、私は伝統あるゐのはな同窓会会長にご推挙をうけましたが、浅学非才到底その任ではございせんし、また、長い間千葉から離れていた関係からも適任ではないと考えまして、再三固辞してまいりましたが、小林金市先生をはじめとして多くの方々からのたつてのご要望、遂にもだし難くお引き受けした次第であります。

近年、社会の高齢化が急激に進行しこれに医療態勢が対応できない状況にあることはご承知のとおりであります。さらに新しい医薬品の開発、医療技術の大幅な進歩による医療費の高騰が加わり、医療費抑制の声も聞かれるようになってきました。現在こそ医療の未曾有の危機の状態にあるといっても過言ではないと思います。



なお、その他に医師数の過剰と偏在による医療の不均衡も加わり極めて難しい情勢に立ち到ったのであります。

このような医療をとりまく環境が極めて厳しい折から、今こそゐのはな同窓会は一致団結して、現在のみならず将来にわたる長期的展望を踏まえての綿密な計画を

て、学内外の人材の育成をはじめとして、卒後教育、研修、就職などについても同窓会として取りあげるべき時期が到来したと考えている次第であります。

これらの諸問題につきましては新しい役員の方々をよくご相談致しまして今後の方針を決めたいと存じます。なお、会員の方々のご意見をも十分にうかがいまして同窓会の運営をはかりたいと思っております。何分にも微力ではございますが皆様方のご指導、ご鞭撻をいただいて重責を果たしたいと念願致しております。

名尾良憲先生のご略歴

昭和13年 千葉医科大学卒業
昭和16年 病理学教室勤務
昭和19年 第二内科学教室勤務

祝 昭和63年度 褒賞・表彰

藍綬褒章	吉田清彦先生 (昭24専卒)
紺綬褒賞	河野裕先生 (昭26専卒)
厚生大臣表彰	松永松男先生 (昭10卒)
厚生大臣表彰	勝呂安先生 (昭20専卒)
厚生大臣表彰	齋藤弘先生 (昭21卒)
厚生大臣表彰	渡辺誠之先生 (昭21卒)
厚生大臣表彰	貫洞一夫先生 (昭22卒)
厚生大臣表彰	村浦公二先生 (昭22専卒)
厚生大臣表彰	浅子由己先生 (昭23専卒)
厚生大臣表彰	徳政義和先生 (昭24専卒)
日本医師会表彰	後藤秀倫先生 (昭10卒)
日本医師会表彰	永井友二先生 (昭16・12卒)
日本医師会表彰	国井光智先生 (昭21卒)

井出源四郎前千葉大学長 退官記念式典開催される

病理学第一講座教授 三方淳 男 (昭32慶大卒)

昭和63年10月15日、ホテルニュートンカモトで井出源四郎前学長の退官記念式典と祝賀会が開催された。式典は第二病理学教室の近藤洋一郎教授の司会で進められ、吉田亮千葉大学長、国大協代表・北條舒正信州大学長、香月秀雄放送大学長、木村康実行委員長、村山智医学部長らの祝辞が寄せられた。第一病理学教室の三方淳

昭和23年 三重医学専門学校教授
昭和24年 都立豊島病院内科医長
昭和45年 都立豊島病院院長、東京女子医科大学客員教授 (兼任)

昭和49年 三葉病院院長
昭和53年 三葉病院名誉院長
現在 東京都社保支基金審査委員



午後六時より祝賀会が開かれた。肺癌研究施設病理研究部門・林豊教授の司会のもと、病理学会代表影山圭三慶応大学名誉教授はじめ、千葉市長ら多方面の方々からの祝辞が寄せられた。参加者も四百名を越え、井出先生の御活躍の場の広さと深さをうかがわせた。

各地るの は な 会 だより

安房るの は な 会

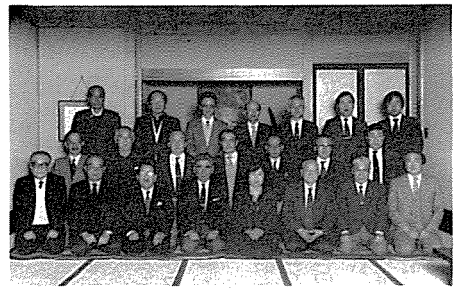
総会開催

安房るの は な 会 総会 は、2月26日 館山市波奈総本店で、高橋英世教授、安達恵美子教授、地元出身川名正直帝京大教授をお迎えして二年振りに開催された。今回は、まだまだ元気一杯の関谷正一会長(大13)が高令を理由に勇退を懇望されたので役員改選となった。年令順の鈴木孝輔(6)、安藤建治(9)両氏がお元氣なのに固辞されたので、白幡静夫氏(13)が新会長に推され、幹事には本位田泰介氏(28)岡野和夫氏(27)原久彌氏(34)青木謹(36)が推せんされた。

総会の後、高橋教授は学内事情を、安達教授は「海外トビックス」と題し、眼とその周辺の面白い話」と題し講演して下さい、出席会員は両教授のお話に久し振りの安房るの は な の 息吹きに酔わされた。出席会員は次の各氏。

関谷正一(大13)、鈴木孝輔(6)、白幡静夫(13)、橋本与志郎(16)、野原安(17)、伊賀多朗(22)、高木達(25)、佐々木弘夫(25)、本位田泰介(28)、貴家昭而(30)、西川義明(34)、原久彌(34)、佐伯陳哉(35)、青木謹(36)、本多満(37)、中村宏(43)、上村公平(50)、渡辺啓治(61)。

過去二年間の当地区会員の動静は、安房医師会々長であった小谷庸氏(24)が昨年一月逝去され、後任に副会長の本位田泰介氏が推され就任し、本年四月再選されている。



安房医師会直轄の安房医師会病院外科には、奥井教授の御高配で、上村公平氏(50)が着任し、業績をぐんぐんあげて安房医師会々員の期待を一身に浴びている。内科は、稲垣教授の御厚意により、六ヶ月毎月、又、肺内科栗山教授の御配慮により、昨年四月から二ヶ月毎の交代で新進気鋭の若手医師が着任している。館山保健所長は、昨年四月より小倉敬一氏(36)から安藤由記氏(40)に交代している。(内は卒業年)

〔青木 謹(36)記〕

るの は な 同 窓 会
神奈川支部報告

前支部長、末永直光先生(昭20卒)の後を継ぎ、十年若返り昭30卒の富田裕先生が、千葉、東京についての大大所帯、神奈川支部長となった。



第一外科の奥井教授の御講演があり、久しぶりに母校の近況を聞くことができた、思い様々であった。医進一年から学四までの本学の

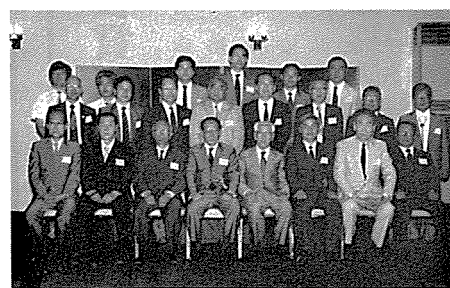
生が健在らしいが、会に出られるのは小田原の津田修二先生(大12卒)の91才を最高とし、下はせいぜい昭38卒の49才までであった。何とか若手にも出て貰いたいと、前役員も努力をされたが実現しなかった。この最大の問題を如何に解決すべきか、討議を重ねた。遠因は学生時代と卒後の結び付きがない為に、糸が切れた風みないに同窓会員としての自覚がなく、また会にたいする魅力もないのが現実で、若手から見れば父母が祖父(まだ祖母になる年代はいない!)位の先輩にはギャップが大きすぎたという結論であった。新支部長の肝入りで、初めて神奈川県人の学生さん、実家が県内で今春国試に合格したフレッシュマンを招待しての総会を企画し、6月25日ホテルリッチ横浜で開催した。総会後、

るの は な 同 窓 会
長野支部総会

るの は な 同 窓 会 長野支部総会 は、去る6月25日松本市松本館において行われた。母校からは学長の井出源四郎先生と整形外科第三代教授に就任早々の守屋秀繁先生を御招きした。

当日の出席者は21名で百瀬支部長の開会の辞および挨拶のあと、小林滋先生から前年度の事業ならびに会計報告がなされ、続いて次の支部長に須坂病院院長熊谷信夫先生を全員一致で選出したと講演会に移った。井出先生には長野県出身ということで毎回御出席頂

男子学生十余名が参加され、会始まって以来の結集人数と盛り上がりで大先輩諸氏を喜ばせてくれた。若手一同が壇に上がり、出身高校、趣味、抱負、会への希望など喋ってもちょうと、場内からは「俺も○○高だ」「卒業したら帰って来いよ」「引き受たゾー」等野次がとど壇に駆け上がり肩を組みあうシーンもみられた。若手も「こんな先輩がいるなら」と心強く思い、先輩はそれなりに責任を感じ、「同窓とは実に良いものだ」の感を深くした。



新役員(一)内は卒業年度
支部長 富田 裕 (30)
副支部長 小林 賢 (30)
常任理事 高橋柳子 (32)
常任理事 野呂忠慈 (34)
会計監査 森 豊 (37)
(高橋柳子記)

るの は な 同 窓 会
静岡支部総会開催

去る8月27日(土)、熱海市、ホテル大野屋で静岡県のるの は な 同 窓 会 総会 が開催された。

出席者は50名程だったが、来賓として御多忙の中を吉田亮学長と三輪清三名譽教授においでいただいた。吉田先生には「大学の近況」



というテーマでお話を頂いたが、ユーモラスな中にも現代の大学の姿を彷彿とさせるものがあり、なる程と拝聴致したしだいである。三輪先生は益々お元氣で翌日は湯ヶ野 三面へつづく

二面よりつづく
で釣りをされる由。また、厚生省保険局医療課長の谷修氏(昭38卒)より「医療をめぐる諸問題」と題する記念講演があった。現在の出来高高い制の保険医療制度と自由診療制は変えぬとしながらも、再度医療制度の改革の必要と老人増加による医療費急増の為、定額医療制度の導入の必要を説いておられた。つまり、医療制度を

クラス会だより

昭八会クラス会

昨年、千葉医科大学卒業50周年記念誌「ゐのはな半世紀」を刊行した昭八会(昭12卒)は、本年5月22日(日)、十数年振りで千葉市で51年目のクラス会を開催した。昨年、木村康医学部長の御厚意によって消息が判明した孔緑卿兄(上海医科大学法医学系顧問教授)の来日出席を期待して、諸準備を進めていたが、本人の健康上の理由で実現出来なかったのは残念であった。

当日の出席者は24名(会員16名、夫人7名、準会員1名)で、日向幹事の司会で開会。昨年11月に他界された相澤八郎兄を含めて40名の物故者にねんごろな黙祷を捧げた。綿貫兄の乾杯の音頭で宴が始まり、日向幹事が昨年来、何人かの級友の自宅や病院を訪問したビデオを上映したり、旧制高校寮歌を歌ったり、ユニークなクラス会であった。明年度幹事は横山兄に決まり、日向、久富両君も引き続き

えて標榜医制度に手をつけ、認定医制度を導入し、その中に家庭医を取り入れる。そして老人医療をターゲットにして、定額医療制度を実施していく方針と思われた。懇親会も土地柄、美人芸妓の舞の中、酔う程に盛り上がり、二次会三次会と艶っぽく夜は更けていった。二年後は、静岡市で行われるが、益々盛況にならんことを望む。(佐藤 通昭35卒記)



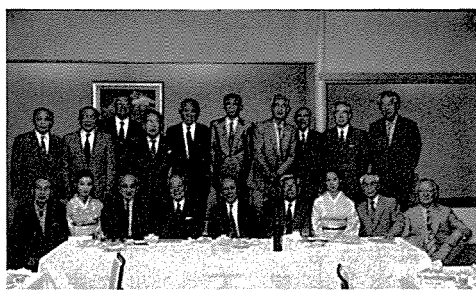
(久富良次記)

幹事を務めることになった。

出席者…綿貫重雄、水野有文、鈴木敏、川北良平、住田満也、飯田政雄、小松源二、巖彰、日向秀夫、千葉保次、細井四郎、植竹順、村上実、菅井規矩雄、小泉寿、久富良次、村上、住田、植竹、日向、久富、菅井、綿貫、尾本各夫人。計報・5月29日に大分県佐伯市の土屋六衛兄が他界されました。

卒業50周年記念 九耀会クラス会開催

昭和九年入学のクラス会は九耀会・千葉家の家紋の九耀星に因んで「九」というが、卒業50周年を迎えたので、昭和63年5月21日防衛庁のグランドヒル市ヶ谷で記念クラス会を開催した。小林龍男名誉教授、香月秀雄放送大学長をお招きして



御講話を拝聴した。席上、級友名尾良恵君が次期ゐのはな同窓会会長就任が内定したことが披露された。20年前に同じ場所で卒業30周年記念クラス会を開催したときは、松村先生、佐々先生、赤松先生、詫摩先生、鈴木正夫先生がお元氣に御臨席になられ、お話を頂いたが、恩師諸先生はすでに御逝去され、当時出席の級友29名の内12名が亡くなっており感慨無量である。戦争および混乱の戦後を経験して半世紀というわけであるが、亡

昭和19年卒クラス会

我々のクラスの大部分は、昭和13年旧制高校入学なので丁度本年で50年になります。昭和16年入学時クラスは65名でありましたが今迄に21名の旧友を失いました。

前回昭61・10・18東京八重洲口で行い25名集合しましたが、翌年2月大志摩君を、11月には今迄千葉で万年幹事をしていた元氣な滝沢君を失いました。入学時の3分の1を失った事になります。今回は栃木県の温泉で一泊と言う事になり昨年千葉東病院院長を退職し、郷里の矢板市に帰った金子兵庫君と小山市在住の小生が幹事を務める事になりました。昨年12月アンケートをとり場所は鬼怒川温泉に決定、あさやホテル八番館に6月11日・12日と致しました。集る者、同伴12名をまわして20名は遠出のため、致し方ありませんでした。本年7月31日を以て千葉大学長を退任される井出源四郎君、20年卒業の東京医歯科大学長の加納六郎君、既に教授を退任された桑田次男君を筆頭として順次来し方を語り欠席者の近況の葉書を

くなられた恩師、級友を悼んで文集「ゐのはな追憶」を上梓した。出席者…石村貞雄、伊藤清夫、大築安春、鴻忠義、神谷博達、北村武、熊谷利雄、久保田正助、白幡静雄、杉谷榮助、武田正、土屋隆義、名尾良恵、武藤三男、宗像市之助。(鴻 忠義昭13卒記)



散、再会を期しました。尚出席者は上段右より、井出源四郎、福岡誠吾、弘中秀典、稲垣秀雄、窪田夫人、長夫人、平形義人君、中段右より、加納六郎、長良則、天谷一榮、清水衛、佐藤洋、窪田英造、金子兵庫君、前列右より、早川和夫、高嶺登、森川不二男、榎本英男、桑田次男、峰英二君の20名です。(長 良則記)

昭二七会クラス会 関西地区で開催

昭和62年度昭二七会は11月14日吹田市千里石亭で開催された。新幹線車中の汗を浴室で流した後、開宴。初の関西での開催と一年ぶりの再会で宴はずみ、夫人を交

廻覧し行く末の永からん事を願って一夜の宴を繰り広げました。翌朝は所用の5名と別れ、マイクروبাসで竜王峡、霧の深い大笹牧場、鶯の鳴く六方沢を散策し、日光田母沢御用邸を見学し、最後に名物ゆば料理に舌鼓を打って3時に解



出席者は、夫人同伴組が大浜博利、岡本昭二、大塚 功、小川源太郎、小沢昭司、関口和夫、澁谷実、原 恒男、本間康正、藤田龍五郎、柳沼 敦の11組、単身組は神保 鎮、塩田昭夫、長崎 進、橋爪 壮、広田和俊、松浦徳久、宮川昭平、三橋慎一、矢島愛二の9名、総勢31名であった。(藤田龍五郎記)

えて打ち解けたなごやかな歓談は尽き難く、更に別室での二次会へと、秋の夜は長く続いた。翌15日早朝、摂丹街道を経て京都府亀岡に至り、そこから舟で保津川を下る。舟中に坐し、溪谷の山水の静寂さを心ゆくばかり味わった。二時間弱で嵐山に到着。大河内山荘や天龍寺で彫しい鮮やかな紅葉の下をそぞろ歩く。渡月亭でゆっくりと京都料理を味わい、午後には龍安寺を参観した。幸い好天に恵まれ、半日秋たけなわの古都の風情を満喫でき、家族的な楽しい旅行であった。

『八千会』便り

前日までの雨が嘘の様に止んだ昭和63年5月21日(土)、第26回目の八千会総会が久し振りに大阪タミナルホテルで行われた。

関東、中京、中国、四国、九州など各地より一堂に会した16名の会員を前に、森会長の歓迎の挨拶があり、次いで大田幹事の総務報告、小関監査による監査報告がなされた。森会長から来年度の八千会開催予定地を千葉市とした旨提案があり、満場一致で承認された。懇親会では遠来の原君が乾杯の音頭を取り、一年振りの再会を祝して酒宴が開始された。今までほとんど顔を見せなかった友も加わり、宴はいやが上の盛り上がりを見せた。八千会会員はその昔空襲によって母校を焼かれたり、戦後外地の学校から引き揚げてきたり、終戦時開病の為休学中であった者達が、昭和22年5月千葉医大の一角に構成されたクラスに合流した、いわば破船会会員とでもいえる面々なのである。逆境の許に育ったかつての若者達の絆の強さは26回を数える同窓会記録に照らしでも明らかであろう。

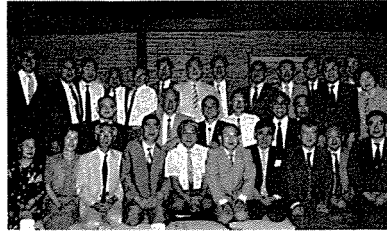
杯を重ねるに従って、卒後の37年間も瞬時に縮まり、和氣満々、学生時代の苦勞話や思い出話に花が咲いたが、徒に回顧主義に陥る事なく未来に生き甲斐を求める旺盛なハンガリー精神には往年を彷彿させるものがあつた。出席者、磯部宏志、大沢弘和、大田和明、河野裕、小関芳昌、佐々木三雄、

佐藤宏、椎木四郎、鈴木玄強、鷹野悦三、内藤和穂、成田一郎、中島正純、原寛、森豆敬、山田正三〔河野 裕(昭26卒)記〕

昭和63年度昭三一会

梅雨明けの待ち遠しい7月23日、昭三一会を東京赤坂・吉祥で開催(幹事松丸・杉山・上原、31名が出席した)。

閑静なたたずまいの中、一年ぶりの顔、久しぶりの顔に肩を叩き合い、人間幾つになっても変わら



ないなあと、共に学び語り合った三十数年前に想いを馳せた。

松丸さんの司会、五味淵さんの音頭で乾杯、懐石料理を囲んで山口豊教授から記念校31本とヒマラヤ杉は順調に育っていること、医学部の現況、ボルチモア医師会長の

に当選された中沢弘さんにわが三十七周年記念誌を届け感謝に咽んだことなど、北川定謙厚生省保健医療局長からは厚生省も懸命にやっているので御理解をと結ばれたが、同級生として心強い限りである。

各自の近況、感想、情報交換が三時間にわたって行われた。国立病院院長、副院長等要職にある方も多く、実地医家の春秋会も充実している由。昭和31年卒の私共は地味ではあるが、融合はいかたう、診療に研究に趣味に協力し合い、それぞれの立場で誠心誠意尽くしている姿に接して、互いに明日への氣力を実感した。研究機関や医療行政への要望も語られ、千葉大学の一層の発展が切望された。明年度は庵原・西原・関幹事のもと、七月開催の予定である。総り多い一とせを期待して。

出席者 猪狩好令、庵原昭一、井幡宏、上野恭一、上原すゑ子、大島一浩、大井清、小野清四郎、川

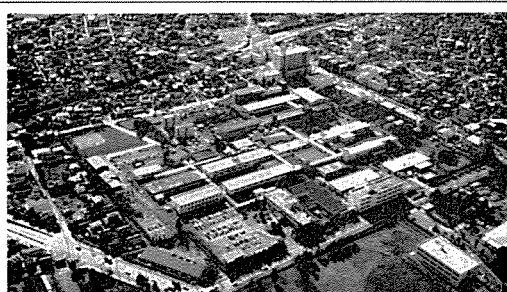
国立療養所下志津病院

院長 森 和 夫

当院の歴史は古く明治30年下志津衛生病院として創設されている。昭和20年厚生省に移管、国立下志津病院として発足、22年結核療養所に転換、国立療養所下志津病院となる。当院はその頃より入院児童の教育を重視し、31年には院内に養護学級が併設され我が国の病弱児童への教育の草分けとなった。結核患者の減少に伴ない他の疾患の入院が39年頃より始まり、同年進行性筋ジストロフィー児の入院、ぜんそく患児の入院を開始、政策医療としての筋ジストロフィー、喘息児の施設療法とともに本邦のバイオリアの役割を果たした。昭和40年には千葉県で初めての病弱養護学校、

上秀一、蟹沢成好、北川定謙、小林誠一郎、香田真一、五味淵諒一、相楽恒俊、重田英夫、志村公男、杉山伸子、関山明美、高沢一郎、滝沢明祐、高野昇、西原源太郎、西沢護、野沢栄司、松丸信太郎、森博志、森 碧、山口豊、山野元、山口慶三〔上原すゑ子記〕

病棟、重障児三、筋ジス三、内科一、外科一病棟の構成であり、その他、腎透析を実施している。又特殊診療棟は、臨床検査科として一般検査の外、県内国療の血液像、R1検査の共同利用の役割をもつと同時に、GC/MS、細胞分析装置、電子顕微鏡等の高度の検査機器を備えて臨床研究を行い、近い将来の臨床研究部の設置(むけて態勢を整えている)。



当院の厚生省移管当時は、病院周辺は、全くの田園であったが、その後の市の発展により今では四街道市の中心となり、駅に最も近い国療といわれる位の地の利を持っている。この地の利と今迄の実績を生かして治療、教育を含めたトータルケアとしての小児慢性疾患の理想的な施設づくりを目指している。又小児から成人領域への慢性疾患の医療態勢を整え、文字通りの生涯ケアを実施したいと考

えて居る。現在当院は神経内科が、東大より来ている外は全て千葉大関係で構成され、院長森昭26卒、副院長西原幸田(昭42卒)以下小児科九名、内科四名、外科三名、神経内科四名、放射線科一名の外にレジデント三名の陣容である。特に内科は昨年より吉田尚教授の御援助により第二内科の全面的バックアップを受け、末石医長(昭48卒)のもとで、一般内科とともに、慢性疾患の生涯ケアの体制作りを努めて居る所である。

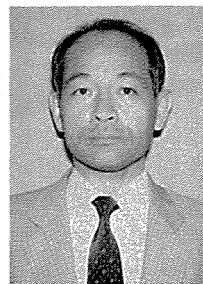
千葉県こども病院「活動に入る」

去る昭和63年9月21日午前10時より、この度千葉市辺田町に新設された『千葉県こども病院』の開院式が行われた。本学出身の船橋茂院長(昭31卒)、真家雅彦医療局長(昭35卒)等を中心に、地上7階、地下1階、二〇〇床の最新設備を誇る美しい病院が10月より活動に入つた。沼田武知事の挨拶、厚生省、自治庁、県市に縁ある人々の祝辞に続き、千葉大学からは吉田亮学長が祝辞を述べた。式後、前庭のミニメントの除幕式があり、色とりどりの風船が一斉に大空を彩り、如何にもこども達の幸せのための病院の出発らしい情景となった。

新任教授紹介

千葉大学医学部解剖学第三講座

教授 千葉 胤 道 (昭39卒)



もの、この度第三解剖学を担当することになり三つの解剖学教室に在籍することになるとは思いもよらないことでした。

教育では、主として神経解剖学を担当しますが、草間教授、大谷教授と引き継がれてきた伝統の上に、時代の要請に応えるカリキ

千葉大学真核微生物研究センター

教授 西村 和子 (昭40卒)



在、内臓真菌症は日和見感染として増加の一途をたどっており、致命的な輸入真菌症の発生も見逃せません。このように、今日、真菌症は各臨床領域に共通した関心事となり、対策のための基礎研究はきわめて重要で

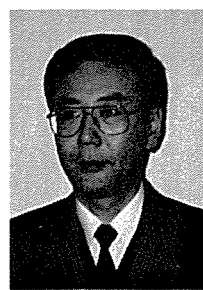
この度、生理学第一講座の教授に九月一日付けをもって就任いたしました。初代の酒井卓造教授以後、鈴木正夫教授、本間三郎教授と優れた医学研究・教育者により主宰され、八十余年の伝統を誇る教室を引き継ぐに当たり、その責任の重大さを痛感しております。

この度、5月1日付をもちまして徳島大学酵素科学研究センターに新設された酵素遺伝学部門を担当することになりました。センタービル設計も進んでおり、近い将来には新しいテーマを開拓したいと考えております。教室員は千葉大昭61卒の村上尚君が助手、熊本大昭62卒の村山尚君が助手、熊本の総勢四人です。現在助手を一人募集しております。新卒でも結構ですが、臨床の先生方で将来医学者として後世に残る様な大きな仕事をしたいという志をお持ちの方ならば、経験は問いません。御連絡くださいれば幸いです。現在のよう

生のうちから自由に生理学教室に入入りできる雰囲気作りも大事かと思ひます。世界で活躍できる人材を一人でも多く輩出し、教室並びに、千葉大学医学部の名を高められたいと思っております。

千葉大学医学部生理学第一講座

教授 中島 祥 夫 (昭46卒)

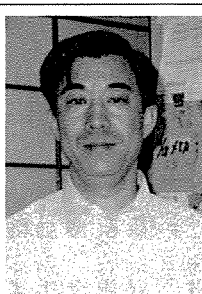


持たたいと考えております。今後、新設教室の整備に務め、教室員一同力を合わせ目標を達成していきたく存じます。一層の御指導、御鞭撻をお願い申し上げます。

行くことに生かせたらと考えております。現在は従来から進めてきたインスリン受容体の構造と機能、遺伝子発現調節およびそのシグナル伝達機構の解析の研究を、生化学、遺伝子工学、細胞工学の手法を駆使して行っております。

徳島大学酵素科学研究センター

教授 蛭 名 洋 介 (昭48卒)



私達が現在持つべき技術を使い、医学生物學上どのような課題に取り組みべきなのか考え、近い将来には新しいテーマを開拓したいと考えております。教室員は千葉大昭61卒の村上尚君が助手、熊本大昭62卒の村山尚君が助手、熊本の総勢四人です。現在助手を一人募集しております。新卒でも結構ですが、臨床の先生方で将来医学者として後世に残る様な大きな仕事をしたいという志をお持ちの方ならば、経験は問いません。御連絡くださいれば幸いです。現在のよう

一九八八年九月一日付けで、解剖学第三講座を担当することになりました。母校を離れて約十年間、佐賀医科大学の創設に参加し、臓器別のカリキュラム、チュートリアル制度、小論文と面接による入学試験、推薦入学、共同研究施設などの新しい制度を体験出来たことは良い勉強になりました。

この度、真核微生物研究センター・真菌系統発生分野の教授に選出され、九月一日付をもって就任致しました。本分野は一九八七年五月の本センター設立に伴って新設されました。一口に真核微生物と申しますが、真菌(カビ、酵母、キノコなど)、原虫、藻類その他を含む巨大な微生物群です。当分野は病原真菌を取り扱い、その菌学と系統保存を主な研究目的としております。

コッホの結核菌発見以前にカビによる皮膚感染症は知られており、皮膚科領域における真菌症の重要性はいうまでもありませんが、現

私是一九六五年に卒業後、インターンを経て皮膚科学教室に入局致しました。大学院の前半二年間は腐敗研究所(生物活性研究所の前身)にて藤原喜久夫教授に微生物学の御指導を仰ぎ、以後は故竹内勝名誉教授、岡本昭二教授のもとで皮膚科学を学びました。六年間の国立習志野病院勤務を含めて

現在の、基礎医学に取り組もうと

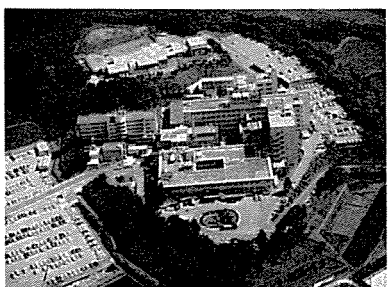
第六面六段目へつづく

君津中央病院創立50周年に寄せて

君津中央病院院長 唐 木 清 一 (昭28卒)

昭和13年、木更津の旧街外れ、蓮田の緑と水に囲まれた地に当院が創立されてより、半世紀を経過致しました。この年は日中戦争勃発の翌年に当り、福祉行政の府である厚生省が発足し、また国民健康保険法が施行された時でもあります。

当初の経営母体の故か、保証責任医療購買利用組合連合会君津病院という長い名称で、木造二階建



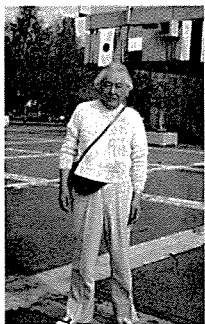
50床、大学の全面的支持で、海保保(昭和6年卒)院長他7名の医師及び看護婦の派遣を得て、診療8科で開院しました。その後経営主体は農業会、厚生連を経て、昭和26年、郡内国保連が運営する病院と変り、昭和39年、純然たる市町村立病院として君津中央病院と改め、昭和43年9月に、老朽化した旧施設を廃し、東京湾を一望する木更津市桜井の丘に地下一階、地上六階の白亜の新病院を建て、

三角構想の主要拠点でもあります。今後、社会変革や医学の進歩をくみ、且つ住民の要望にそった医療を供給できる病院へと脱皮してゆかねばなりません。そのために、患者さんへの「和」を大切に、患者さんに心暖まる医療を行える地域基幹病院であり、また大

更には、高度医療、特殊医療、救急医療などの充実も計り、現在58床、標榜21科、職員数600余名の本院に大佐和分院、附属看護学校を擁し、県南の基幹総合病院として発展してきました。

窪田金次郎教授退官祝賀会

東京医科歯科大学歯学部顎口腔研究施設構造研究部門



窪田金次郎教授退官祝賀会

窪田金次郎教授は昭和23年千葉医科大学を卒業され、東大医学部助手を経て昭和28年より東京医科歯科大学に35年間勤務の後、本年3月31日付で定年退官された。去る4月23日、ホテルニューオータニで退官記念祝賀会が二百数十名の出席のもとに盛大に行われた。この会には、小林金市ゐのはな同窓会長や、千葉大の先輩である東京医科歯科大学加納六郎学長をはじめ同窓の方々と関係者が多く出席された。先生が学術交流に尽くされた東ドイツ駐日大使の祝辞も寄せられた。先生の近著『解剖学入門』咀嚼システム解明への道(日本歯科評論社刊)が出席者に記念贈呈された。

窪田先生は4月より東京医科歯

より部外者に贈られる最高の表彰である。(木内政寛 昭39卒記)

川崎富作先生 昭23専卒 日本医師会医学賞を受賞

に日本医師会研究助成費 教授(昭36卒)

日赤医療センター小児科、川崎富作部長は、昭和63年度日本医師会医学賞を受賞された。記念講演は「川崎病に関する研究」であった。先生は長年、厚生省や文部省の研究班で中心的役割を果たされ、ご自身が世界に先駆けて記載された川崎病の病因解明に努力されておられる。先生の研究業績は、去る昭和61年にはベリリング北里賞に輝いておられる。

また、慶応義塾大学川村光毅教授(解剖学)は、「小脳性運動失調動物モデルによる移植脳内の神経回路形成の研究」により、日医医学研究助成費を受けられた。入力線維群に実験的障害を与えた小脳に胎児脳組織を移植し、小脳組織の修復、再構築を調べる意欲的な研究である。先生は去る56年にも大脳皮質連合領の研究で同助成費を受けておられる。

高田典彦先生 昭40卒

東邦大学客員教授に就任

千葉県がんセンター、整形外科部長、高田典彦先生には本年6月1日付をもって、東邦大学医学部の客員教授(整形外科)に就任されました。先生は千葉県がんセ

「一視同仁」(鴻 忠義 著) (私家版) A5版、77頁、昭和63年秋刊

鴻先生が昭和13年、本学を卒業されて眼科学教室に入局、その後中国の病院、医専に奉職された当時の中国人との交流を中心に、折に書かれた十五の短い随筆をまとめたもの。当時の動きが手に取るようにわかり興味深い。今でも医学部正門を入ってすぐ右側の茂みの中にひっそりと建っている「辛亥革命」の記念碑のことが、碑文全文、その日本語訳、その碑をめぐるエピソード等を添えて詳しく書かれているのは有難いことである。(S・M)

人事移動

教授昇任 西村和子(昭40卒) 真核微生物研究センター・真菌系統発生分野

中島祥夫(昭46卒) 生理学第一 徳永 毅(昭42卒) 岡山大学解剖学第三

北原 宏(昭43卒) 整形外科学 野田公俊(昭52東北大卒) 微生物学第二

講師昇任

五面よりつづく 生物学研究の多くの分野で壁に突き当たっているのが現状です。このような壁を突き破るのは数ではなく、終局的には一人の個性にふれる才能と情熱であると思います。科学の世界では、いつの時代でもこのような一匹狼の科学者が求められます。一匹狼というのは放っておいても育つと思いますが、そのような若い研究者を育てられたいと願っております。

柳橋雅彦(昭46卒) 精神医学 勝呂 徹(昭47卒) 整形外科学 坂口 明(昭48卒) 内科学第三 千葉県こども病院院長 船橋 茂(昭31卒)

訃報

桜井 得一(大9) 62・3・31 成澤 四郎(昭20) 63・5・7 加藤栄三郎(昭17) 63・6・3 三浦健太郎(昭56) 63・6・3 武者 宏作(昭8) 63・7・1 近藤 春(昭23) 63・7・1 小倉 英文(昭16) 63・7・11 犬飼 正(昭5) 63・8 蓮見喜一郎(大14) 63・8・20 (卒年) 没年月日

編集後記

☆私事で恐縮ですが、12月より岡山大学へ転勤致しました。遠隔地でもあり編集長も交代させて頂くつもりです。村山 智先生はじめ編集委員の先生方に心より御礼申し上げます。(徳永 毅)